

3－8					
主題	ご利用者 1 人ひとりに合わせた排泄物品の選定と施設現場からの改善案の提言				
副題	「とりあえず」からの脱却を目指して				
キーワード 1	排泄援助	キーワード 2	物品の見直し	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 泉陽会 第二光陽苑
発表者(職種)	榎本大(介護職員)、市川弾(介護職員)
共同研究(実践)者	中江菜々子(リーダー介護職員)

電 話	03-5991-9917	FAX	03-5991-9918
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	当施設は平成 11 年開設の練馬区にある特別養護老人ホームです。1 階に地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、通所介護、訪問介護事業があり、2、3 階に特養 100 床、ショートステイは 10 床となっています。令和 2 年度の補助金を活用し、令和 3 年度より睡眠状況の確認システム、見守りカメラ、センサーベッドを導入。活用を進めています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設では排泄ケア会議を毎月開催しており、オムツメーカーと排泄物品の使用状況に関するレポートの確認や、排泄援助の方法等について検討している。その中で以前より挙がっていた課題として、ご利用者 1 人ひとりの体型に合ったサイズのリハビリパンツやオムツを使用できていないこと、経験則や先入観が先行してオーバースペック、サイズの物品を多数の方に使用している等があった。そこには「とりあえず大きい物をあてておけば安心」という職員心理があり職員都合の援助と言える状況が見受けられた。

具体的な使用状況としては、アウター物品はリハビリパンツ、オムツともに S、M、L の 3 サイズ。その内、リハビリパンツ S サイズ使用者の割合が 8% に対して M サイズが 80%。オムツも S サイズ使用者の割合が 9% に対して M サイズが 88% という状況であった。インナーパッドは、日中推奨の物と夜間推奨の物を 3 種類導入していた。しかし、上記のように夜間推奨の物を日中、夜間問わず多数のご利用者に使用しており、その他の日中推奨の物品を含めた 2 種類の使用割合は計 28% と低いものであった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

目的は、ご利用者主体、ADL を考慮した上で適切な物品と使用方法を決めて職員都合での排泄援助から脱却すること。そのうえで、ご利用者に沿った排泄援助を継続できるよう、職員全体の排泄援助への意識向上を目指すこととした。

仮説については二つ。1、適正物品を使用することで尿漏れが減少し、ご利用者の負担や不快感が軽減することで装着感等も改善することで QOL の向上に繋がるのではないか。2、物品の見直しと適正化により、コストの低減に繋がるのではないか。

《3. 具体的な取り組みの内容》

初めに試供品としてインナーパッドと S サイズオムツをフロアにて使用。ご利用者や職員へのアンケートをおこない使用感を確認した。これを踏まえ、物品見直しの方針を排泄ケア会議にて決定。次にオム

ツメーカーより指導を受け、排泄物品の選定と使用方法についての勉強会を介護職員を対象に会議メンバーにて実施。本実践を含め、お一人おひとりに合わせた排泄援助への理解が深まるよう促した。

その後、導入物品の変更へ向け具体的な改善案を作成、施設経営会議に提出し直接提言をおこなう。改善案の内容に関しては、新物品導入により適正サイズを使用できるご利用者の人数の概算を提示。インナーパッドを日中用と夜間用に区別することで安易なオーバーサイズの使用を減らしていくという方針も示して、排泄物品の見直しをする意義について提起した。

以上を踏まえ、導入物品の変更が決定。ご利用者が使用する物品について、居室担当職員を中心に再度選定をおこない、確認のための個別フィッティング表の作成も実施。選定内容を基に具体的な納品数を排泄ケア会議にて決定し業者へ依頼。フロアでの使用開始に至る。

《4. 取り組みの結果》

S サイズのオムツは他サイズと同様のモデルを導入。構成比は改善前のリハビリパンツ S サイズ使用者の割合が 8% に対して改善後が 47% と増加。オムツは S サイズ使用者の割合が 9% に対して改善後が 55% と増加。M サイズ、L サイズともに使用者が減少し、全体で約 5 割の方がサイズを変更。

インナーパッドは日中用、夜間用と区別化。夜間用パッドに関して原則、日中には使用を控えるようにフロア間で周知。構成比は改善前の夜間用パッドの使用割合が 72% に対して、改善後は 50% と減少。

また、8 名のご利用者に聞き取りにてアンケートをおこなったところ、改善後のリハビリパンツやオムツはご自身の体型に合っているか、について「はい」の回答が 7 名、「いいえ」の回答が 1 名。パッドの装着感が改善されたか、について「はい」の回答が 5 名、「わからない」との回答が 3 名。性能について満足しているか、について「はい」の回答が 8 名。ご自身で物品を扱うご利用者 6 名を対象に物品は扱いやすいか、について確認し「はい」との回答が 4 名。「わからない」との回答が 2 名となった。

《5. 考察、まとめ》

上記のように使用物品の構成比が大きく変化し、目的は一定の成果が確認でき達成感を得ることができた。また、コスト面に関しても物品変更前後 3 ヶ月ずつの物品納品数を基に比較し、全体で約 35% の減少となった。しかし、個別の指定に沿わないで介護職員が物品を使用してしまっている状況も見られるため、継続的な周知等が必要であると考え。またご利用者の状態に合わせた継続的な確認が必要であるため、本実践を踏まえて職員同士の啓発などにつなげていくことが重要であると考え。

また、排泄物品の性能だけに頼るのではなく、職員の技術の向上や ICT 機器の活用を通じて、よりご利用者の QOL が向上するよう、援助していくことが望ましいと考える。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本実践をおこなうにあたり、ご本人に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「平成 28 年国民健康・栄養調査報告 第 2 部 身体状況調査の結果」(厚生労働省)

<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyuu/h28-houkoku.html> (2023 年 6 月 19 日)

「ライフリー 2023 年度版カタログ」(2023) ユニ・チャーム株式会社

《8. 提案と発信》

日々、勤めていると変化をすることに躊躇し「とりあえず」という選択肢を選びがちではないか。それがご利用者の快適な生活に繋がれば良いが、そうではない場合、それは好ましくないものである。

排泄物品をはじめ、より良い物が生み出されている。施設に生活されている方が、よりご自身に合ったものを使用できるよう、現場の職員として考え、発信していくことの積み重ねが QOL の向上につながる一歩になることを伝えていきたい。